

高さ 21 メートルの巨大ブランコ ワット・スタット (タイ)

ラーマ 1 世が命がけで祀った、タイで最も美しい大仏。

勤勉なお坊さんは「中道を歩むこと、自分自身を見ることが大切」とお話ししてくれました。

ワット・スタット礼拝堂



バラモン教の祭具だった 21 m のブランコ

鳥居ではなく、巨大なブランコ

タイのバンコクにある“バムルン・ムアン通り”。この道路の両脇には仏像、仏壇、供物などの店がずらりと並ぶ仏具店専門のストリートで、その距離はなんと 600m。

敬虔な仏教徒で賑わう通りを進むと、神社の鳥居が天高くそびえたっているのが見えます。日本の神社では見たこともない程の高さには驚かされますが、それでも日本人だったら誰が見ても“支柱の長い鳥居”と思うでしょう。ところがこれは鳥居ではなく、21 m もある巨大なブランコなのです。

これはその昔、バラモン教の儀式に使われた祭具で、

この高所からロープをたらし、つるされた小舟に乗った僧侶が、前へ後ろへと天を舞いながらその年の豊作を祈ったのです。想像しただけでも心配になるほど危険な儀式ですが、実際に何人もの僧侶が大けがをし、中には亡くなった方もいました。そこで 1930 年代にこの儀式は廃止され、ブランコは撤去、現在の鳥居のような姿だけが残っているのです。

このブランコがあるのがワット・スタットという王宮寺院です。現在の首都バンコク朝（ラタナコーシン朝）の創始者たる、ラーマ 1 世の命により 1807 年に着工し、完成したのは 27 年後のラーマ 3 世の時代でした。



磨かれた床が美しい、広い中庭



タイで最も美しいと称される礼拝堂の大仏

労を重ねて祀った大仏

礼拝堂にはタイ最大の青銅の大仏、高さ8メートルのシーサーカヤムニー仏が鎮座しています。

これはラーマ1世が遠いスコタイから船で運んだもので、その道中は王が自ら指揮を取ったというのです。水路を越えやっこの寺院に辿り着いたものの、大仏のあまりの大きさに、城壁を通ることができません。そこで王は一度その城壁を壊してまで、この大仏を運び込んだのです。

苦労を重ねて祀った大仏ですが、王はこの一連の過酷な仕事で体調を崩し、仏像を無事に納めたと同時に「王としての役割を全うした」と崩御（逝去）したというのです。まさにラーマ1世が命がけで祀った仏像。細身の女性的なスタイル、穏やかに流れる目、タイで最も美しいと言われる姿にも納得です。

見どころ満載のお寺

礼拝堂や本堂の囲む壁、天井、柱には一面の絵画が描かれています。そこには同じ構図は一切なしに、当時の生活や街並み、戦の様子などが細かく表現されています。回廊には輝きを放つ仏像が並び、その数は100体以上。中庭がとても広く、磨かれた床がお堂や石仏を美しく映しています。本堂には等身大の僧侶の人形がずらりと正座し、高僧からのお説法を真剣に聞いているように見えました。

中道を歩む、勤勉なお坊さん

もっとお寺のことを教えてもらおうと、歩いていたお坊さんに尋ねてみました。

「私はこのお寺の僧侶ではないのです。今日は研修で来ました。このお寺ではパーリ語という“仏教聖典”



回廊に並び 100 体を超える仏像



本堂に正座する等身大の人形

を学ぶことができるのです。仏教は奥が深いですからね。ずっと勉強、たくさん知識を身に付けたいです。」

——タイのお坊さんはどんなことを大切にしますか？



パーリ語を学びに来た勤勉なお坊さん

私は「偏らないことです。厳しすぎてもダメ、緩すぎてもダメです。中道ですね。」「そして、どんな時でも自分自身が何をしているのか、冷静にすることが大切です。この目を養うにはかなりの集中力が必要なんですよ。」

齋藤 浩司 (さいとう こうじ)

株式会社B-WAY グループ 代表取締役

互助会から葬儀社を経て2001年同社創業。2002年に葬送支援NPO法人を創設。2010年には宗教法人を新規認証。CSR活動として、

2007年お寺で余ったお供え物を困窮世帯へ届けるフードバンクを設立。2013年からは東南アジアの貧しい子ども達への生活・教育支援を開始し、現在はカンボジアのスラムで孤児院と幼稚園を運営。活動時に各国の聖地を訪れ、宗教家や現地の人々から文化を学んでいる。東京都新宿区出身。

